

土地分類基本調査

五所川原

5万分の1

国土調査

青森県

1986

序 文

限りある国土を有効に利用するためには、その土地の属性を科学的方法で調査し、統一的に把握した資料にもとづいて土地利用が進められる必要があります。このような観点から実施されている都道府県土地分類基本調査は、国土調査法にもとづき県が事業主体となり、国土調査費補助金を得て実施しているものです。

本県では、昭和40年3月に経済企画庁から「八戸」図幅が発行されて以来、途中休止したりしながら、県内42図幅のうち本冊子で15図幅を完成させることができました。

この調査の成果は前年度までは地形分類図・表層地質図・土壤図・傾斜区分図・水系谷密度図・土地利用現況図の6図及び説明書からなっていましたが、岡山県で開催された全国現地検討会の討論結果を踏まえ、今年度からは地形分類図と傾斜区分図を合体させて表現し、さらには、財政窮乏の折から谷密度図は20万分の1の縮尺にし、地形分類図の余白に表示することにしました。

今後の土地利用・開発及び保全等のために広く利活用されることを切望するものです。

調査の実施に際し、御指導と御協力をいただきました関係各位に、深く感謝の意を表します。

昭和62年3月

青森県農林部長

工藤 俊雄

目 次

序 文

総 論

I 位置及び行政区画	1
II 地域の特性	
1. 地勢・気候	4
2. 人口と世帯数	7
3. 交 通	8
4. 産 業	9

各 論

I 地形分類図	15
1. 地形概説	15
2. 地形細説	15
II 表層地質図	21
1. 地質概説	21
2. 表層地質細説	21
III 土壌図	35
1. 土壌分類の細説	35
(1) 山地及び丘陵地の林地土壌	35
(2) 台地及び低地の農用地土壌	38
(3) 屏風山砂丘地域の土壌	41
IV 土地利用現況図	44

調査担当者一覧表

総合・企画指導	国土庁土地局国土調査課		
総括	青森県農林部土地改良第一課		
地形分類調査	弘前大学教育学部	教授	水野裕
	八戸工業高等専門学校	教授	堀田報誠
表層地質調査	弘前大学教育学部	教授	岩井武彦
	弘前大学理学部	研究生	山内仁
土壌調査			
山地及び丘陵地の土壌（林地）			
	大鰐営林署	経営課長	松尾弘
	青森県林業試験場	造林科長	赤坂正一
台地及び低地の土壌（農用地）			
屏風山砂丘地域の土壌（農用地）			
	青森県農業試験場	次長	相馬駿春
	青森県りんご試験場	土壌改良科長	成田春蔵
土地利用現況調査	青森県農林部土地改良第一課		
		主査	相馬清治

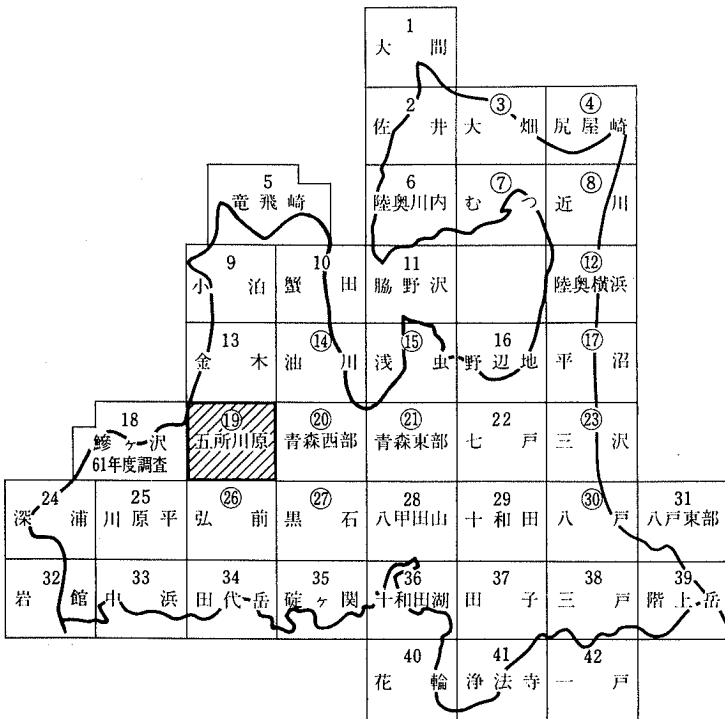
總論

I. 位置及び行政区画

1. 位置

「五所川原」図幅は青森県の西部に位置し、東経 140° 15' ~ 140° 30', 北緯 40° 40' ~ 40° 50' の範囲内にあり、図幅内調査面積は 386.37 km² である。

第 1 図 位置図

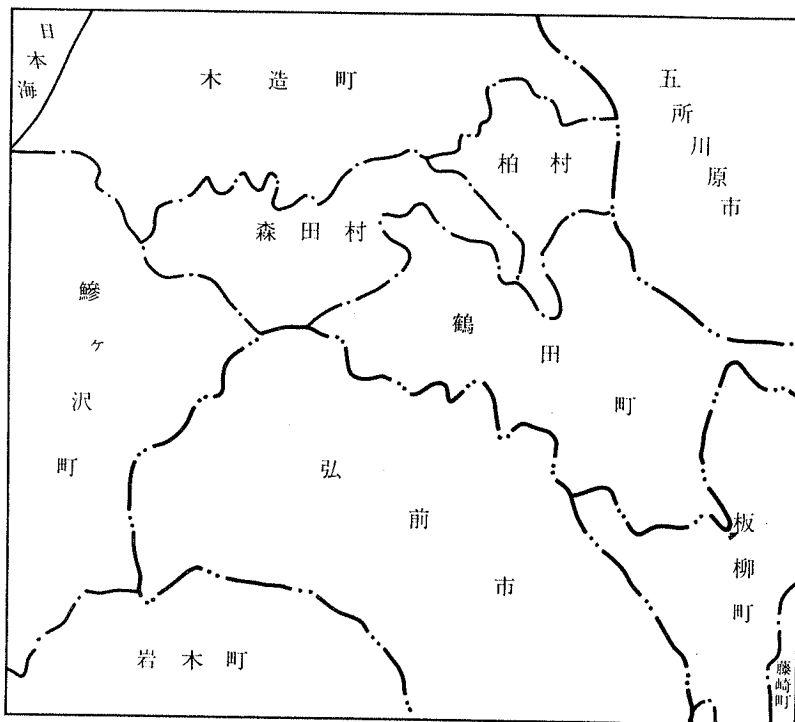


注) ○印は印刷発行済図幅である。

2. 行政区画

本図幅内の行政区画は第2図のとおりであり、弘前市、五所川原市、鯨ヶ沢町、木造町、森田村、柏村、岩木町、藤崎町、板柳町及び鶴田町の2市6町2村からなっている。第1表のように、この図幅が占める面積の割合は、10市町村全体面積の32%である。

第2図 行政区画図



第1表 市町村別面積

(単位：Km²，%)

市町村	全 体 面 積		図 幅 内 面 積		占有率 $\frac{B}{A}$
	面積 (A)	比 率	面積 (B)	比 率	
弘 前 市	273.41	22.8	87.02	22.5	31.8
五所川原市	167.53	14.0	43.47	11.2	26.0
鯨ヶ沢町	340.22	28.4	51.09	13.2	15.0
木造町	120.67	10.1	56.98	14.8	47.2
森田村	23.98	2.0	23.98	6.2	100.0
柏村	13.98	1.2	13.98	3.6	100.0
岩木町	147.41	12.3	30.79	8.0	20.9
藤崎町	21.78	1.8	3.11	0.8	14.3
板柳町	42.80	3.6	30.00	7.8	70.1
鶴田町	46.12	3.8	45.95	11.9	99.6
計	1,197.90	100.0	386.37	100.0	32.3

- 建設省国土地理院「昭和59年全国都道府県市区町村別面積調」(昭和59年10月1日現在)
- 図幅内面積は、5万分の1地形図をプランメーターにより計測したものである。

II. 地域の特徴

1. 地勢・気候

(1) 地 勢

この地域は青森県の西部に位置し、図幅南西部には青森県の最高峰岩木山(1,625 m)の中腹部から山麓部が伸びてきており、岩木山の北側から東側に向かって山地、丘陵地、台地、低地の順に低くなっている。

この低地は津軽平野と呼ばれ、青森県の最も広い低地であり、岩木川がほぼ中央を蛇行しながら北流し、低地の西側には砂丘砂による屏風山地域が存在する地勢を示し、青森県の穀倉地帯となっている。

(2) 気 候

図幅の南西部は山地丘陵、他は低地で主として田地帯となっているが、日本海からの冬の季節風はさえぎられることがないため、この地域独特の「地ふぶき」と呼ばれる降った雪が風のために舞い上る暴風雪により、交通などの生活環境がきわめて、きびしい状況下にある。

五所川原観測所の観測資料によれば、第2表の気象概表に示すとおり年平均で気温が10℃、降水量が1,331 mm、日照時間が2,151時間、降雪量が667 cm となっている。又、昭和25年から昭和59年までの月別の最大極値表は第3表。最小極値表は第4表のとおりである。

第2表 気象概表 (昭和25～59年)

五所川原観測所

月別 区 分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
最高気温(℃)	1.0	1.4	5.1	13.2	19.1	22.0	26.3	27.9	23.4	17.4	10.2	3.7	14.2
最低気温(℃)	-5.2	-5.5	-2.4	3.2	8.4	13.2	17.9	18.9	13.9	7.2	2.4	-2.3	5.8
平均気温(℃)	-2.1	-2.1	1.3	8.2	13.8	17.6	22.0	23.4	18.6	12.3	6.3	0.8	10.0
日照時間(h)	110	150	211	210	237	223	232	229	195	170	104	80	2,151
降 水 量(mm)	157	106	77	61	66	93	98	129	143	116	137	148	1,331
降 雪 量(cm)	198	148	82	5								65	667
積 雪 深(cm)	53	76	53	16								4	20

注) 降雪量は40年～54年、積雪深は25年～54年 日照時間は38年からの統計

第3表 平均月別最大極値表(昭和25～59年)

五所川原観測所

月別 区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
最高気温(℃)	3.27 (48)	4.25 (34)	8.50 (34)	16.2 (58)	22.02 (25)	23.90 (55)	29.50 (30)	31.72 (26)	25.88 (50)	18.90 (57)	12.08 (43)	6.85 (43)	月別平均最高気温 値の35年間の最大 値()は発生年次
最低気温(℃)	-2.80 (58)	-2.87 (48)	0.27 (41)	5.47 (34)	9.69 (36)	15.57 (54)	21.49 (53)	20.65 (48)	16.50 (50)	10.23 (54)	4.09 (52)	0.54 (54)	月別平均最低気温 値の35年間の最大 値()は発生年次
平均気温(℃)	0.10 (47)	0.42 (34)	3.91 (47)	10.90 (58)	15.45 (45)	19.60 (55)	25.32 (53)	26.12 (26)	21.19 (50)	14.27 (54)	7.75 (43)	3.47 (43)	月別平均気温値の 35年間の最大値 ()は発生年次
日照時間(h)	174.9 (49)	197.1 (49)	262.1 (48)	281.9 (46)	309.5 (45)	306.6 (48)	308.4 (47)	279.9 (50)	252.3 (45)	227.2 (57)	177.0 (46)	136.8 (45)	
降水量(mm)	276.0 (45)	234.0 (52)	153.8 (31)	198.0 (39)	181.0 (57)	213.0 (54)	202.0 (59)	366.0 (43)	282.0 (49)	207.6 (30)	266.0 (52)	268.0 (44)	
降雪量(cm)	10.46 (49)	8.95 (50)	6.10 (52)	1.00 (40)							6.75 (54)	9.16 (47)	
積雪深(cm)	99.19 (49)	167.17 (49)	145.09 (45)	74.92 (45)							18.90 (37)	48.41 (31)	

第4表 平均月別最小極値表(昭和25～59年)

五所川原観測所

月別 区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
最高气温(℃)	-2.07 (52)	-1.69 (53)	1.00 (45)	10.57 (40)	15.82 (30)	18.70 (58)	22.40 (58)	23.60 (55)	21.30 (56)	16.02 (43)	6.30 (56)	0.64 (49)	月別平均最高气温 値の35年間の最 小値)は発生年次
最低气温(℃)	-7.26 (28)	-8.20 (28)	-5.63 (45)	1.22 (45)	6.92 (30)	10.22 (29)	14.08 (29)	16.65 (28)	12.19 (28)	5.59 (37)	0.66 (28)	-5.59 (27)	月別平均最低气温 値の35年間の最 小値)は発生年次
平均気温(℃)	-4.26 (52)	-4.10 (27)	-2.31 (45)	6.58 (40)	11.37 (30)	14.69 (29)	18.62 (29)	19.80 (55)	17.31 (39)	10.50 (58)	4.03 (28)	-2.12 (27)	月別平均気温値の 35年間の最小値 ()は発生年次
日照時間(h)	74.0 (51)	58.2 (58)	173.9 (41)	171.5 (39)	211.6 (43)	148.2 (56)	176.1 (59)	160.3 (56)	156.7 (42)	139.9 (43)	25.6 (44)	37.7 (59)	
降水量(mm)	70.0 (57)	18.0 (25)	36.0 (55)	22.0 (59)	13.0 (45)	25.0 (48)	14.0 (51)	5.9 (26)	72.0 (58)	21.0 (52)	54.7 (32)	62.0 (36)	
降雪量(cm)	3.10 (46)	2.37 (47)	0.70 (42)	0.50 (54)							0.80 (52)	2.70 (54)	
積雪深(cm)	8.77 (48)	13.57 (34)	2.75 (34)	0.50 (54)							1.00 (32)	2.00 (33)	

2. 人口・世帯数

昭和50年から60年までの10年間の人口については第5表に示したとおり、弘前市は11,100人増え、五所川原市・柏村・岩木町の3市町村は微増、残りの6市町村は減少している。率で見れば鱈ヶ沢町と森田村が10%近く減少している。

一方、世帯数については、森田村を除いては人口は減っているのに世帯数は増えるという現象を示しており、これは全国的に進んだ核家族化のあらわれと思われる。合計で見れば弘前市だけが主に人口が増え他は減っているため、10年間では人口が6,737人増えているのに、入れ物である世帯数はそれよりも多い10,191人増となっている。

なお、一世帯当りの平均人員は0.4人減っており、55年の国勢調査の時に人口が一番多くなっている。

第5表 市町村別人口と世帯数

(単位：人，世帯)

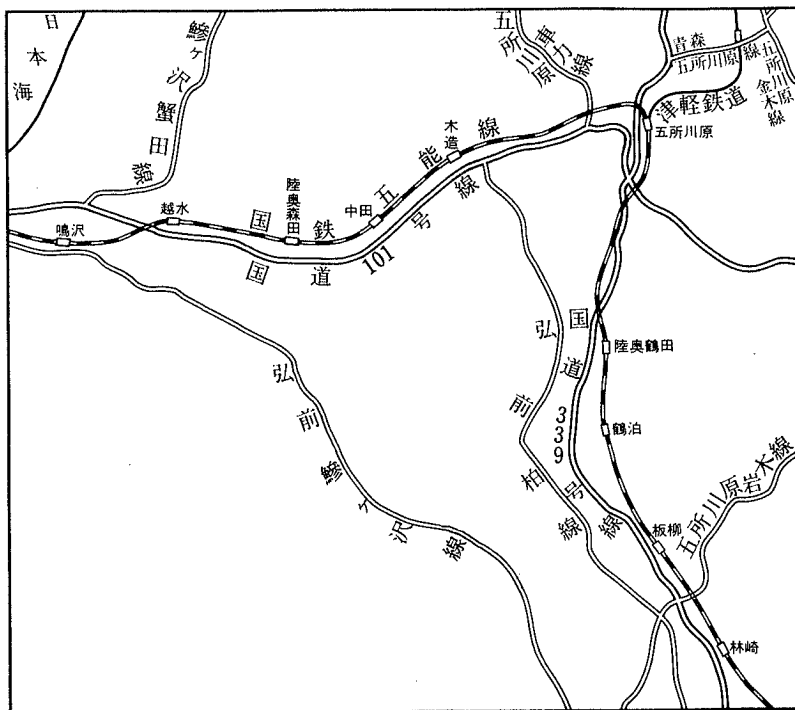
区 分 市町村	年 別	昭和50年	昭和55年	昭和60年	$\frac{C}{A} \times 100$ %	1世帯当りの平均人員		昭和60年 1km ² 当り 人口密度
		国勢調査 (A)	国勢調査 (B)	国勢調査 11月11日 速報(C)		50年	60年	
弘前市	人口	164,911	175,330	176,082	106.8	3.5	3.2	644.0
	世帯数	47,496	53,094	54,971	115.4			
五所川原市	人口	49,040	50,632	49,538	101.0	3.8	3.4	295.7
	世帯数	12,829	14,287	14,607	113.9			
鱈ヶ沢町	人口	18,086	17,402	16,377	90.6	4.1	3.7	48.1
	世帯数	4,373	4,480	4,434	101.4			
木造町	人口	24,945	24,551	23,264	93.3	4.4	3.9	192.8
	世帯数	5,675	5,869	5,936	104.6			
森田村	人口	5,711	5,420	5,174	90.6	4.5	4.1	215.8
	世帯数	1,263	1,281	1,259	99.7			
柏村	人口	4,909	4,832	4,962	101.1	4.3	4.1	354.9
	世帯数	1,149	1,177	1,197	104.2			
岩木町	人口	12,594	12,923	12,774	101.4	4.4	4.3	86.7
	世帯数	2,864	2,960	2,983	104.2			
藤崎町	人口	11,101	11,206	10,989	99.0	4.3	4.1	504.5
	世帯数	2,608	2,713	2,705	103.7			
板柳町	人口	18,999	19,215	18,492	97.3	4.2	3.9	432.1
	世帯数	4,555	4,660	4,693	103.0			
鶴田町	人口	17,245	16,892	16,626	96.4	4.4	4.0	360.5
	世帯数	3,917	4,062	4,135	105.6			
計	人口	327,541	338,403	334,278	102.1	3.8	3.4	279.1
	世帯数	86,729	94,583	96,920	111.8			

3. 交通

この地域における交通体系は第3図に示すとおりであるが、一般国道の101号線は東西に走り青森市から能代市まで続き、339号線は南北に縦走り弘前市から三厩村まで続いている。他に主要地方道として弘前鯉ヶ沢線、鯉ヶ沢蟹田線、青森五所川原線などがある。

国鉄五能線は奥羽線の川部駅より、日本海側の海岸沿いを走り、能代駅まで続いている。又、冬の風物誌として知られる「ストーブ列車」の私鉄津軽鉄道は、五所川原市から金木町を通り中里町まで続いている。

第3図 主要交通図



4. 産業

2市6町2村の産業別就業人口は第6表のとおりで、合計では昭和50年の国勢調査時点から5年後のそれまでに7,282人増えているが、内訳を見ると一次産業は7.8%分の9,619人が減り、二次は3.2%の6,247人が増え、三次も4.6%の10,655人が増えている。5年間のうちで就業人口が減っているのは木造町と森田村であり、一次産業はすべての市町村で減っている。一次のうちでもその大宗をなすのは農業であり、二次と三次はすべての市町村で増えている。これは農業における水田利用再編対策が強化されると共に機械化が進んだことにより、農業から他の職場に仕事を求める人が多かったことによるものと考えられる。

昭和57年度の市町村別産業別純生産については第7表のとおりであるが、弘前市は第3次産業が80%を越え、1次産業は6.9%と第3次に占める割合が高い。又、弘前市の10市町村に占める生産所得の割合は62%と高く、津軽地域の中心地となっていることがわかる。

木造町、森田村、岩木町及び鶴田町は一次産業の占める割合が30%台と高く、農業に主体をおく自治体となっている。

弘前市は津軽地域の中心地であり、10市町村の総計に占める割合を第8表で見れば、製造業においては事業所数が62%、従業者数が59.6%、出荷額が59.7%となっているが、りんごを中心とする食料品関係で占められているものである。又、商業においては商店数で54.7%、従業員で61.6%、年間販売額で67.2%を占めている。

農業粗生産額については第9表のとおりであるが、主に米に依存しているのが五所川原市、鱒ヶ沢町、木造町、森田村、柏村、鶴田町であり、りんごに依存しているのが弘前市、岩木町、藤崎町、板柳町となっている。

第6表 産業別就業人口

(単位：人)

区分	総数		第1次産業			第2次産業			第3次産業		
	農 業	林 業	漁 業	計	鉱 業	建設業	製造業	計	産 業	計	
市町村	(76,754)	(222)	(81)	(21,666)	(84)	(5,841)	(6,381)	(12,306)	(42,782)		
弘 前 市	82,208	205	51	19,356	31	7,608	6,915	14,554	48,298		
五所川原市	(23,201)	(56)	(4)	9,724	(23)	(1,938)	(976)	(2,937)	(10,540)		
	23,876	67	4	7,243	18	2,785	1,267	4,070	12,563		
鱒ヶ沢 町	(8,085)	(158)	(270)	(3,889)	(-)	(1,065)	(375)	(1,440)	(2,756)		
	8,200	170	264	3,217	3	1,554	403	1,960	3,023		
木 造 町	(12,045)	(8)	(4)	(7,721)	(5)	(880)	(267)	(1,152)	(3,172)		
	11,763	14	10	6,011	16	1,428	422	1,866	3,886		
森 田 村	(2,774)	(18)	(-)	(1,772)	(1)	(218)	(52)	(271)	(731)		
	2,632	20	-	1,363	1	256	89	346	923		
柏 村	(2,438)	(1)	(-)	(1,614)	(1)	(131)	(69)	(201)	(623)		
	2,445	2	-	1,340	-	203	88	291	814		
岩 木 町	(6,693)	(24)	(1)	(4,165)	(24)	(565)	(318)	(907)	(1,621)		
	7,265	24	-	3,873	6	793	489	1,288	2,104		
藤 崎 町	(5,659)	(-)	(5)	(3,179)	(1)	(503)	(296)	(800)	(1,680)		
	5,847	-	2	2,723	4	696	364	1,064	2,060		
板 柳 町	(9,594)	(1)	(3)	(6,036)	(8)	(466)	(294)	(768)	(2,790)		
	10,005	2	10	5,576	6	798	361	1,165	3,264		
鶴 田 町	(8,229)	(4)	(2)	(5,297)	(4)	(588)	(314)	(876)	(2,056)		
	8,513	5	5	4,741	3	892	406	1,301	2,471		
計	(155,472)	(492)	(370)	(65,062)	(151)	(12,165)	(9,342)	(21,658)	(68,751)		
	[100.0]			[41.9]				[13.9]	[44.2]		
	162,754	509	346	55,443	88	17,013	10,804	27,905	79,406		
	[100.0]			[34.1]				[17.1]	[48.8]		

昭和55年「国勢調査」による。()内数字は、昭和50年国勢調査。()内数字は構成比%

第7表 市町村別産業別純生産

(単位：百万円、%)

区 分	生産所得	第1次産業			第2次産業			第3次産業		
		農業	林業	水産業	計	鉱業	建設業	製造業	計	産業
市町村	(100.0)				(5.7)			(12.8)		(81.5)
弘前市	303,936	16,797	391	19	17,208	73	19,015	19,898	38,985	247,743
五所川原市	(100.0)				(9.4)			(17.5)		(73.1)
	78,165	7,245	100	—	7,345	272	6,192	7,206	13,671	57,149
鱒ヶ沢町	(100.0)				(19.9)			(20.8)		(59.3)
	20,673	3,326	440	340	4,106	62	3,154	1,088	4,303	12,264
木造町	(100.0)				(32.2)			(11.8)		(56.0)
	25,952	8,093	276	0	8,369	102	2,305	658	3,064	14,519
森田村	(100.0)				(30.4)			(17.5)		(52.1)
	5,696	1,728	4	—	1,732	—	694	303	998	2,966
柏村	(100.0)				(26.4)			(20.9)		(52.7)
	4,852	1,281	1	—	1,282	—	571	440	1,012	2,558
岩木町	(100.0)				(27.1)			(19.3)		(53.6)
	12,805	3,417	49	—	3,466	—	1,802	672	2,474	6,865
藤崎町	(100.0)				(21.4)			(20.3)		(58.3)
	10,224	2,188	—	—	2,188	—	1,564	510	2,074	5,962
板柳町	(100.0)				(21.7)			(13.1)		(65.2)
	16,364	3,540	16	2	3,559	2	1,577	566	2,145	10,660
鶴田町	(100.0)				(27.7)			(16.9)		(55.4)
	14,118	3,884	21	1	3,905	—	1,466	917	2,383	7,830
計	(100.0)				(10.8)			(14.4)		(74.8)
	492,765	51,499	1,298	362	53,160	511	38,340	32,258	71,109	368,516

青森県企画部統計課「昭和58年度市町村民所得統計」。 () 内数字は構成比

注：区分の計は、四捨五入の関係で合致していかないものもある。

第8表 製造業と商業

区分	製 造 業 (59.12.31)			商 業 (60.5.1)		
	事業所数	従業員数 (人)	出 荷 額 (百万円)	商 店 数	従業員数 (人)	年間販売額 (百万円)
市町村						
弘 前 市	301	7,354	83,759	3,377	18,141	433,737
五所川原市	72	1,921	34,005	998	5,209	141,076
鱒ヶ沢町	24	499	4,315	344	937	12,078
木 造 町	22	382	1,873	329	1,147	14,723
森 田 村	5	237	1,445	71	289	3,963
柏 村	6	128	1,737	67	288	6,568
岩 木 町	9	377	3,940	138	388	4,939
藤 崎 町	12	253	2,293	180	650	8,269
板 柳 町	22	374	1,960	344	1,139	15,477
鶴 田 町	12	806	4,771	227	700	8,779
計	485	12,331	140,098	6,075	28,888	649,639

青森県統計課「昭和59年青森県の工業」，「昭和60年青森県の商業」

第9表 農業粗生産額(昭和59年)

(単位：百万円, %)

区分	粗生産額	耕						種				畜産				農蚕	加工農産物
		米	麦雑類	野菜	果実	工業作物	乳肉牛	豚	鶏	その他							
市町村																	
弘前市	34,634	8,314	187	1,925	22,629	389	135	1,006	13	36							
五所川原市	12,710	8,799	93	382	3,134	50	42	170	34	6							
鱒ヶ沢町	6,188	2,943	71	1,271	1,409	134	39	315		6							
木造町	12,569	9,252	165	2,733	150	116	64	74	14	1							
森田村	3,088	1,778	24	165	935	20	74	91		1							
柏村	2,283	1,403	26	54	756	17		27									
岩木町	7,440	1,901	57	537	4,642	132	156	9		6							
藤崎町	4,721	1,870	3	94	2.6	55	41	16	8	3							6
板柳町	7,588	3,194	13	155	4,111	61		36	14	4							
鶴田町	8,716	3,676	22	125	3,089	22	5	1,757	19	1							
計	(100) 99,937	(43) 43,130	(1) 661	(7) 7,441	(43) 43,480	(1) 996	(1) 556	(4) 3,501	(0) 102	(0) 64							(0) 6

第32次青森農林水産統計年報より、麦雑類には豆、いもを含む。()内数値は構成比

各 論

I. 地形分類図

1. 地形概説

「五所川原」図幅地域は青森県の西部に位置し、図幅南西部に岩木火山、図幅ほぼ中央より東側には津軽平野が広がり、この間に台地が帯状に分布している。

図幅南西部には、頂上部が南隣の「弘前」図幅に位置している岩木山のほぼ北半部が広い面積を占め、これを取りまく形に丘陵地や台地が分布している。この台地は標高・傾斜・開析状態・構成物などから上位面（Gt I面）・中位面（Gt II面）・下位面（Gt III面）に区分される。また、図幅の北西端には日本海に沿って分布する台地性の屏風山砂丘地の南端部分がみられる。一方、図幅の東半部には岩木川およびその支流の十川沿いの低地からなる津軽平野が広がり、このつづきは北隣の「金木」図幅へとつづいている。

2. 地形細説

(1) 地形区

本図幅内の地形は、標高 起伏量 地形面の性質・構成物・地域的まとまりなどから火山地（I a）、丘陵地（II a～II b）、台地（III a～III c）、低地（IV a～IV b）に大別される。地形区としては次のように区分した。

「火山地」	I a	岩木山火山地
「丘陵地」	II a	高津森山丘陵
	II b	黄金山丘陵
「台地」	III a	飯詰台地
	III b	山田野台地
	III c	屏風山砂丘地
「低地」	IV a	津軽平野
	IV b	鳴沢川低地

(2) 地形分類

岩木山火山地 (Ia)

本図幅の南西部に位置する火山地で、岩木火山のほぼ北半部が図幅内に位置している。岩木山の山体は、全体的には円錐形をなし、「津軽富士」ともよばれ、山頂（標高1625 m）は南隣の「弘前」図幅中に位置している。岩木山は典型的な二重式火山で、山頂部は3峰に分れているが、巖鬼山と鳥海山は外輪山の一部であり、岩木山はその後に出来た鐘状形の中央火口丘である。岩木山の山体には爆裂火口が大小合せて10個以上もあり、円錐形の山体に変化を与えている。この爆裂火口のうち最大のものは、巖鬼山の北側にある赤倉爆裂火口で、長径 600m、短径 300m、深さは 100m 以上に達する。なお、この爆裂火口に源を発する赤倉沢は本図幅中においても急峻な谷地形を呈している。岩木山は標高約 500m 以上が主に輝石安山岩の熔岩からなる山体であり、500m 以下が裾野となっている。この広い裾野を構成しているのは、大部分が火山性の岩屑流（火山泥流）と火山性の扇状地の堆積物である。この火山性の岩屑流はその分布や構成物などからみて1回に噴出したものではなく、作っている地形にもその差が表われている。また、構成物中に岩塊の多い岩屑流は、その流れの末端部に「流れ山」とよばれる小丘地形を数多く形成し、北東麓の十面沢や十腰内付近にみられるような特異な景観を呈している。

高津森山丘陵 (IIa)

図幅の西端部に位置する丘陵で、高津森山（標高 130m）を中心とした起伏量 100m/ km² 以下の低山性の丘陵地である。構成物は新第三紀鮮新世の鳴沢層とよればれる地層で、凝灰岩や泥岩の薄層をはさむ青灰色～暗灰色の砂岩が主体である。なお、この丘陵地のつづきは西隣の「鱒ヶ沢」図幅へつづいている。

黄金山丘陵 (IIb)

図幅の南端中央部に位置する丘陵で、黄金山（標高 168m）を中心とした起伏量 100m 前後/ km² の低山性の丘陵地である。構成物は安山岩凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩・泥炭を有するシルト岩・凝灰質砂岩・砂・礫・粘土などである。なお、これらの構成物は洪積統のうちでも一番古いものと思われる。

飯詰台地(Ⅲa)

図幅の北東端にわずかに分布する砂礫台地である。この台地の主部は東隣の「青森西部」図幅内にある。Gt Ⅱ(中位)面とGt Ⅲ(下位)面の2地形面に分けられるが、Gt Ⅱ面が大部分である。台地の標高は約60m以下で、傾斜は3°未満である。

山田野台地(Ⅲb)

岩木山火山地(Ⅰa)と津軽平野(Ⅳa)との間に帯状に分布する砂礫台地である。台地面はGt Ⅰ(上位)面、Gt Ⅱ(中位)面、Gt Ⅲ(下位)面の3地形面に分けられる。

Gt Ⅰ面は、この台地の西端部にわずかに分布する標高40~60mの海成の段丘面であるが、最近土取り場となり、かなり地形が改変されている。傾斜は3°~8°である。

Gt Ⅱ面は、岩木山火山地の北方では保木原・勝山・共栄開拓付近など、東方では廻堰南方や大森付近などに広く分布する。火山山麓緩斜面に近いところには火山泥流丘(流れ山)がこの地形面や下位のGt Ⅲ面にも分布し、特に廻堰大溜池の南西方では著顕である。これら火山泥流丘の凸部を除けば、標高15~50mの平坦面が広く、傾斜は3°未満が大部分である。

Gt Ⅲ面は、この台地西方の福原・森田付近にかなり広く分布し、上位のGt Ⅱ面と同様に海成の段丘面である。一方、東方の廻堰・小友・泉田付近のGt Ⅲ面は、谷底平野に沿うものもあり、海成と河成の2つの性格をもっている。この地形面の標高は5~10mで、傾斜は1/30以下が大部分である。

屏風山砂丘地(Ⅲc)

図幅の北西部、日本海と津軽平野(Ⅳa)との間に位置している砂丘地で、砂丘地の主体は北隣の「金木」図幅に広く分布している。この砂丘地は砂丘頂部を除くと、前述の山田野台地(Ⅲb)とほぼ同じ標高である。構成物質は山田野台地にくらべてやや砂質、細粒であり、大部分が砂丘砂におおわれていること、北隣の「金木」図幅ではその特徴がなお一層ははっきりすることから、この地域を台地とせず、砂丘地とした。

砂丘は、火山灰の薄層におおわれた標高約20m以下の砂礫台地を基盤としている。砂

丘砂は冷水沼付近などの露頭でみると、厚さは4mを越える。砂丘の形態は、縦列・U字型・ヘアピン型などがあり、縦列とその部分的に接合したものが多いが、雁沼南方にはヘアピン型砂丘など特異な形態の砂丘も分布している。

砂丘部分を除くと、砂丘間の平坦面・砂丘の風下側の平坦面は台地面であり、Gt II面が大部分であるが、越水・駒田付近などには下位のGt III面もわずかながら分布している。傾斜は1/100以下のところがほとんどであるが、越水付近には1/30以下のところがある。

津軽平野(IVa)

図幅の南東から北流する岩木川の両岸一帯に広がる低地を津軽平野とよぶ。岩木川はこの河区ではよく蛇行し、随所に蛇行河跡を残し、また同時にその周辺には自然堤防の発達も著しい。

自然堤防は、形成時代の異なる新旧2つの自然堤防に分けられる。形成の新しい自然堤防IIは、岩木川の河床に接して狭小ながら比較的良好に連続して分布している。しかし、自然堤防の大部分は形成の古い自然堤防Iである。この新旧2つの自然堤防面間の比高(高度差)は岩木川沿岸の各所でみられるが、図幅南部の大川付近3~4m、鶴田南方の野木付近で約2~3m、五所川原西方の下古川付近で約1~2mであり、下流へ向うほど小さくなる。

津軽平野は、図幅北東部に位置する飯詰川の扇状地を除けば、廻壇大溜池北方の妙堂崎から桑野木田~姥菴~米田とはほぼ東方へつづく線で、上流側の谷底平野IIと下流側の三角州に2分される。この妙堂崎~米田の線を境に、上流域の津軽平野一帯には前述の自然堤防IIが岩木川右岸でよく発達しており、主にりんご畑に利用されている。一方、この線から下流域では自然堤防I・IIは共に発達は悪く、狭く断片的であり、相対的に自然堤防より低い三角州面が広がっている。傾斜は飯詰川沿いの扇状地では1/100以下、妙堂崎~米田の線以南の谷底平野IIでは1/300以下が大部分であり、一方この線以北の三角州性低地の部分は1/1,000以下である。

鳴沢川低地(IVb)

図幅西端を西流する鳴沢川沿いの谷底平野部である。上流部分は岩木山火山地(Ia)

に、中・下流域は高津森山丘陵(Ⅱ_a)と山田野台地(Ⅲ_b)との間に位置し、河口部分は西隣の「鱒ヶ沢」図幅内にある。短小な低地ではあるが、傾斜はその割にはゆるやかで1/1,000～1/30程度である。

水野 裕 (弘前大学教育学部)

堀田報誠 (八戸工業高等専門学校)

参考文献

- 橋本尚幸ほか（1979）：岩木火山の北半部の地形学的考察——特に赤倉沢泥流堆積物の泥流丘について——地質調査所月報 第30巻 第6号
- 堀田報誠（1962）：東北地方各河川の自由曲流 東北地理 第14巻 第2号
- 堀田報誠（1966）：汎濫原の地形形態 八戸工專紀要 第1号別冊
- 今井敏信・堀田報誠（1973）：5万分の1 「弘前」図幅土地分類基本調査——地形分類——青森県
- 一色直記・大沢穠（1969）：岩木火山北東麓の泥流丘群（演旨）火山 第2集 第12巻 第3号
- 岩見宏次（1961）：岩木山周辺小丘群の岩石学的研究 青森地学 第14号
- 水野 裕（1961）：岩木火山麓の地形——特に泥流堆積物を中心にして——東北地理 第13巻 第3号
- MI ZUNO, Y (1975) : Piedmont Geomorphology of Iwaki volcano
Sci. Rep. Tohoku Univ. 7 ser. Vol. 25
- 水野 裕・堀田報誠（1982）：5万分の1「青森西部」図幅土地分類基本調査——地形分類——青森県
- 小野繁則（1971）：岩木山北東麓の地形——特に流れ山について——弘大地理 Vol.7
- 大沢 穠・平山次郎（1970）：五所川原地域の地質——5万分の1図幅——地質調査所
- 鈴木隆介（1968）：火山体の荷重沈下 火山 第2集 第13巻 第2号
- 鈴木隆介（1972）：岩木火山の変位 地理学評論 第45巻 第11号
- 山本 豊（1971）：岩木川東方地域における微地形——流路変更の考察を中心にして——弘大地理 Vol. 7

<以上>

II. 表層地質図

1. 地質概説

本地域は津軽平野の中央部および、その西南端に屹立する岩木火山の北・東麓とにあたる。津軽平野のほぼ中央を岩木川が北流し、西部は屏風山砂丘を経て日本海に接し、東北部は津軽半島の脊梁をなす中山山脈の西南端となっている。

津軽平野の五所川原市以北は三角州となっており、主として泥炭（または草炭）を挟在する泥質物からなり、五所川原市の南部は巾の広い岩木川の谷底平野となっており、砂礫が主体となっている。また、これら両地域には比較的規模の大きい自然堤防が各所に分布しており、主として砂礫によって構成されている。

津軽平野西部の日本海沿岸部には巾約 3.5km の丘陵性の台地が南北に長く延びており、この台地は洪積統の砂、粘土および砂丘砂によって構成されている。

本図幅の南西部は新期火山の岩木山となっており、山頂附近は外輪山熔岩の安山岩、山腹は火山泥流および火山扇状地堆積物、そして広い裾野一帯は主として火山泥流からなる。また北麓の裾野には数多くの小丘群が形成されており、これらは安山岩塊および安山岩塊を多量に含む火山泥流によって構成されている。さらに津軽平野との接する付近には丘陵性の台地が発達しており、主として洪積統の砂・粘土（前田野目層）、変質火山礫凝灰岩（黄金山層）および粘土礫（山田野層）からなる。

本図幅南西端の岩木山麓に発達する河川の谷壁には鮮新統～洪積統のシルト岩（舞戸層）および砂質シルト岩（鳴沢層）が分布しており、これら堆積岩は標高 400 m 付近まで発達している。

地下資源としては往事石油、ガス開発の調査が行われたが、これらの開発には至っていない。

本図幅中には五所川原市内をはじめ木造町、板柳町、鶴田町など各地多数の温泉が開発されている。また、岩木山北麓の小丘群の一部で採石が行われている。

2. 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

本図幅における未固結堆積物は沖積低地堆積物の泥炭・草炭（P）、泥・泥炭（m）、

砂・礫・泥 (sm) および砂・礫 (sg), 砂丘を構成する砂丘砂 (s), 段丘堆積物の砂・礫 (g), 中期洪積統の粘土礫 (山田野層, Y_g), 砂シルト (前田野目層, M_s) および火山礫凝灰岩 (黄金山層, K_t) である。

泥炭・草炭(p)

本図幅の北部および東部は岩木川によって形成された広い沖積平野が発達しているが、そのうち五所川原市以北は、いわゆる三角州的堆積物の泥質物 (m) によって構成されている。しかして、この分布地には、いわゆる後背湿地が、また砂丘地には砂丘間湿地が形成されており、さらに旧沼池地が各所に分布しており、そこには比較的厚い草炭および泥炭が堆積している。後背湿地の主な分布地は本図幅北部の南広森東部の新山田川付近および下遠山里付近であり、砂丘間湿地は北西部にある屏風山砂丘地の雁沼、ステコ沼、冷水沼等の周辺である。

泥・泥炭(m)

津軽沖積平野の五所川原市以北(標高約8m以下)は、いわゆる三角州的堆積物によって構成されている。これらの地域は、いわゆる軟弱地盤地帯となっており、深度30m前後までは軟弱なシルト、粘土および泥炭等が堆積している。これらは、一部で自然堤防堆積物(主として砂)によっておおわれているが、沖積平野の殆んど大部分の地域に分布している。五所川原市内の本層は後述する軟弱地盤地質の項にゆずるが、木造町付近ではN値が3前後のシルトおよび泥炭が25m~28mの厚さで発達している。

砂・礫・泥(sm)

津軽沖積平野の五所川原市以南は、岩木川とその支流とによって形成された巾の広い谷底平野となっている。この巾の広い谷底平野部にも大規模な自然堤防が各所に形成されているが、全体的に谷底平野堆積物によって構成されている。鶴田町付近では上部の一部には中粒砂(自然堤防堆積物)を挟在しているが、深度25m前後まではシルトが主体をなし、一部に泥炭の薄層も分布している。板柳町付近では深度25m前後までは砂とシルトの互層で、それ以深は砂礫となっている。また、板柳町西部の大峰川流域では軽石の細粒を多量に含む砂礫からなり、特異な地質構成となっている。

砂・礫(sg)

津軽沖積平野には全域に亘って、比較的大規模な自然堤防が形成されている。特に五所川原市～鶴田町～板柳の岩木川の両岸には、巾が1.5km～3kmに及ぶ自然堤防が形成されている。また支流の十川の七ツ館付近一帯にも明瞭な自然堤防が形成されており、ここでは天井川となっているところも見られる。

これらの自然堤防堆積物は場所によって大分異なり、五所川原市付近では主として細粒砂で深度15m前後まで発達している。板柳町付近では細～中粒砂および砂礫からなり、一部にシルト層を挟在している。層厚は不明であるが深度30m以上に及んでいる。

砂(s)

本図幅の西北部の日本海沿岸には東西約4kmの中を持つ砂丘地が南北に長く発達しており、屏風山砂丘地と呼ばれている。本砂丘地には新、旧2つの砂丘があり、旧砂丘は中粒～細粒砂からなり、砂丘地形を残しているものもあるが、多くは平地の下に埋もれている。平地の下に発達する旧砂丘砂の厚さは平均40mに達している。新砂丘砂は細粒砂よりなり、本図幅内では天皇山(標高57m)が中心となっている。本地区の砂丘は浜堤状、平原状砂丘で縦列砂丘の形態を示すもの他西方に口を開いたU字型やヘアピン型の砂丘が形成されている。

砂・礫(g)

津軽平野の西縁部および東縁部には小規模な段丘が形成されている。前者は標高5～10mから20m前後、後者は標高約15mから約30mまでに発達し、主として細円礫を含む砂礫および粘土礫によって構成されている。層厚は薄く2m前後である。

粘土・礫(Yg)

岩木山の北麓端に発達する丘陵性の台地には円礫を多量に含む粘土礫が比較的広く分布しており、山田野層または山田野礫層と呼称されている。礫はよく円磨され、硬質頁岩を主体とする粘板岩や珪岩も含まれている。砂礫質の部分も一部にあるが、大部分は黄褐色の粘土によって膠結こうされている。岩相から、おそらく海岸扇状地の堆積物と考

えられている。本図幅内に分布している本層は標高約 55m までの丘陵地にみられるが、津軽平野の南部の弘前市付近では標高 150m の高さまで発達している。層厚は露頭では 20m前後と、それほど厚くないが、ボーリング資料では 50mに及ぶ所も知られている。

砂・シルト (Ms)

本図幅の北西部の屏風山砂丘地の東部および南部と図幅北東端の飯詰付近とに発達している丘陵・台地は、主として砂とシルトからなる地層によって構成されており、これらは前田野目層（又は立山層）と呼称されている。本層は層厚数mの砂とシルトの互層によって代表されるが、砂には火山灰質の粘土および軽石の火山灰が混在している。シルトは有機物を多量に含むものと凝灰質のものもしばしば挟在するが、全体的には灰色の粘土質シルトが主体をなしている。露頭では層厚を推定することは困難であるが、ボーリングの資料からは 100m以上に達することが知られている。

火山礫凝灰岩 (Kt)

岩木山の東麓端には最大標高 168 m の黄金山を中心に平均 100 m 前後の丘陵が発達している。これらの丘陵は主として成層が比較的明瞭な火山礫凝灰岩によって構成されており、本層は黄金山層と命名されている。

火山礫凝灰岩は全体的に変質が著しく、殆んど大部分が粘土化している。含まれる角礫は灰色～紫灰色の安山岩であるが、この角礫も軟化し、礫として取り出すのが困難なものが多い。また、一部には凝灰質シルトおよび凝灰質砂の薄層が挟され、局部的にスランピング構造を示すところもある。

なお、本層は南接する弘前図幅では、岩木山の古期成層火山を構成する火山礫凝灰岩として取扱ったものである。しかし、今回の調査で、本層中に山田野層に類似の粘土礫や前田野目層にみられる泥炭などを挟在することが知られ、岩木火山噴出物とは異なるものとした。

(2) 固結堆積物

砂岩・砂質シルト岩 (Ns)

本堆積物は新第三系鮮新統～下部洪積統に属するもので、一般に鳴沢層と呼称されて

いる。本層は本図幅の西部、岩木山北西麓に分布するが、岩木火山泥流およびローム質火山灰におおわれているため河川の谷壁・谷底のみに見られるに過ぎない。

本層は全体的に微層理ないし無層理の砂質シルト岩からなり、貝化石のほか、有孔虫、珪藻および海綿の骨針等浅海棲動物化石が多量に含まれている。下位層とは整合漸移の関係にあり、このため調査者によって両者の境界は異なるが、今回は貝化石を産出する部分から本層に含めることにした。また、本層は津軽平野の地下にも広く分布し、ボーリング資料によると、森田村～五所川原市では深度約 200 m までに貝化石を含む本層の分布が知られている。

シルト岩 (Msi)

本岩は隣接する鯉ヶ沢町および中村川流域に広く分布し、古くから舞戸層と命名されているもので、従来は新第三系中新統上部層として取扱われていたが、最近の微化石の研究によって鮮新統～更新統と考えられるようになった。

本層は全体的に塊状の灰色～暗灰色珪藻土質シルト岩によって代表される。しかし、しばしば細粒砂岩および軽石凝灰岩の薄層を挟在し、このため一部では微層理を示すようになる。また、シルト岩中に細粒砂岩のパッチ（長径 5～10cm）を含むことも特徴の一つである。化石としては *Sagarettes*（海綿）が普遍的に含まれている他珪藻および有孔虫化石が報告されている。

本図幅では西南端の岩木山腹に発達する河川の谷壁に、わずかに見られるに過ぎないが、ボーリング資料によると岩木山北～東麓および津軽平野の地下にも広く分布していることが知られている。

(3) 新期火山噴出物

本図幅の南西部には岩木火山があり、この火山噴出物が大半を占めている。岩木火山噴出物は安山岩熔岩、集塊泥流、軽石流、火山泥流および火山扇状地堆積物等からなり、本図幅では、これらの区分によって塗色した。しかし、岩木山麓一帯の表層部はローム質火山灰によって全面がおおわれている。このため地質図には、このローム質火山灰の分布を省略してあるが、この火山灰については欄外に示した露頭柱状図によって表現した。

安山岩熔岩(Ia)

岩木山の山頂に近い部分は安山岩の熔岩からなり、これは外輪山溶岩とみなされている。赤倉沢の谷頭部は爆裂火口となっており、そこには本溶岩の大露頭があり、集塊岩を挟在する8枚以上の溶岩が観察される。また、溶岩の一部は自破碎溶岩となっている。岩質は青灰色～暗灰色、緻密、堅硬、斑状の紫蘇輝石普通輝石安山岩である。

集塊泥流(Iag)

岩木火山北西麓にある白沢および徳明川の両放射谷の上流部には集塊岩様の火山角礫岩が分布している。巨大な安山岩塊を多量に含む砂質凝灰岩は集塊岩とみなされるが、一部は黄褐色のローム質粘土によって膠結されている部分もあることから集塊泥流と呼ぶことにした。本泥流は古期成層火山（大沢磯，1962）を構成するものと考えられている。最近行われている黒坊沼付近での道路工事では本岩の大露頭がみられ、従来笹森山は寄生火山とされていたが、そのような溶岩は見られず、今回は泥流丘として取扱うことにした。

軽石流(Ip)

本図幅の南部の岩木山東麓端に形成されている平坦面は灰色～灰白色の軽石質凝灰岩によって構成されている。この凝灰岩には天然木炭が含まれており、いわゆる軽石流堆積物とみなされる。本層は南接する弘前図幅ではかなり広く分布するが、本図幅では、その北端に当り、わずかに住吉部落付近にみられるに過ぎない、層厚は不明であるが、露頭でも5m以上に達しており、かなりの厚さをもっていると考えられている。

火山泥流(Im)

岩木火山の山頂に近い山腹には多数の爆裂火口があり、それらの山腹・山麓には広い範囲にわたって、いわゆる火山泥流が分布している。これらの泥流はローム質火山灰によっておおわれているため、その区分は困難であるが、泥流丘の特徴などから一応2つの泥流（Im-A, Im-B）に分けて塗色した。

火山泥流A(Im-A)

岩木火山北麓の大森～十腰内付近一帯には比高30m～90mのドーム状小丘が多数散在しており特異な地形を形成している。これらの小丘群には明らかに火山泥流によって供給された安山岩塊の集積によって形成された、いわゆる泥流丘と、小丘全体が一つの安山岩熔岩によって構成されている、いわゆる熔岩丘とが混在している。前者は比較的規模の小さい小丘に多く、多量の巨大な安山岩塊が黄褐色のローム質粘土および火山礫凝灰岩によって膠結されている。後者は比較的規模が大きく、斜面も急傾斜となつているものが多く、一見溶岩丘的である。このため、過去には古期岩木火山あるいは寄生火山などと考えられていたが、大沢禮・平山次郎(1970年)によってこれらは大型泥流丘(“流れ山”)であるとされた。

これらの多数の泥流丘を形成する泥流は赤倉沢爆裂火口から発生したものと考えられ赤倉沢火山泥流堆積物(大沢・平山, 1970年)と呼称されている。

おお、今回は、これら小丘群のうち、安山岩溶岩(自破砕溶岩も含む)のみから小丘については岩木山安山岩溶岩(Ia)として塗色した。

火山泥流B(Im-B)

前記の多くの泥流丘を持つ火山泥流に対し、岩木火山西北麓の火山泥流は、全体的に安山岩の含有が少なく、比較的平坦な地形を呈している。いわゆる泥流丘も少なく、2・3を除くと小規模なもののみである。本泥流の供給源も不明確で、大沢等(1970年)は未区分泥流として取扱っている。

礫・粘土(If)

岩木火山の山腹には、比較的大規模な放射谷が多数発達し、これらの放射谷によって、山頂に近い山腹はかなり深く刻まれている。しかし、その中腹では深く刻まれたV字谷は消え、そこには大規模な扇状地が形成されている。本図幅では西北麓の大鳴沢、長前川、赤倉沢および前范川等の放射谷が発達し、これら放射谷を中心に、標高500m～600mに扇頂をもつ4つの複合扇状地が形成されており、扇端部は標高140m～170mとなっている。

これらの扇状地は、いわゆる土石流および洪水流によって供給された安山岩塊を多量に含む泥流状のものおよび砂礫によって構成されている。本堆積物の厚さは明確でないが、長平付近では約30mとなっている（柱状図参照）。

火山灰

前述したように岩木火山の山麓およびその周辺には岩木火山最後の火山噴出物である降下火山灰が広く分布している。この火山灰はいわゆるローム質の火山灰で黄褐色または赤褐色を呈し、粘土化が著しく進んでいる。

本図幅中に分布する火山灰は下・中・上部の3層に区分され、下部から長平火山灰、髭ヶ沢火山灰および湯舟火山灰と呼称されている。

長平火山灰は全体的に赤褐色を呈し、黄灰色の細粒火山灰および安山岩質角礫凝灰岩を挟在する。重鉱物は磁鉄鉱が主体となり、角閃石および輝石がわずかに含まれている。本火山灰は標高約40m以上に分布している。

髭ヶ沢火山灰は全体的に赤褐色を呈するローム質火山灰で、基部に厚さ1cm～15cmの黄色細粒軽石をレンズ状に挟在している。また、高度が増すにつれ粒径が大きくなり、黄色のラピリとなる。本火山灰は標高約20m以上に分布している。

湯舟火山灰は黄色を呈する細粒軽石によって代表されるもので、本図幅の沖積平野以外の各地に広く分布している。一部にはラピリを伴うところもあるが、全体的には、粘土化は多少進んでいるが、まだ軽石の粒形が残されているのが特徴で、層厚は平均的には20cm～30cm程度であるが、局部的には1m前後と厚くなっているところもある。

表層地質分類と開発および保全との関係

(1) 風化殻

本図幅の殆んど大部分は新期火山の岩木山噴出物と津軽平野沖積堆積物とによって占められているため、いわゆる風化作用が特に問題になるような所はない。

本図幅の西部に、わずかに分布している鳴沢層および舞戸層は、ごく一部に数mの粘土化帯はみられるが、全体的には風化殻は1m前後と浅い状態を示している。

(2) 地質災害

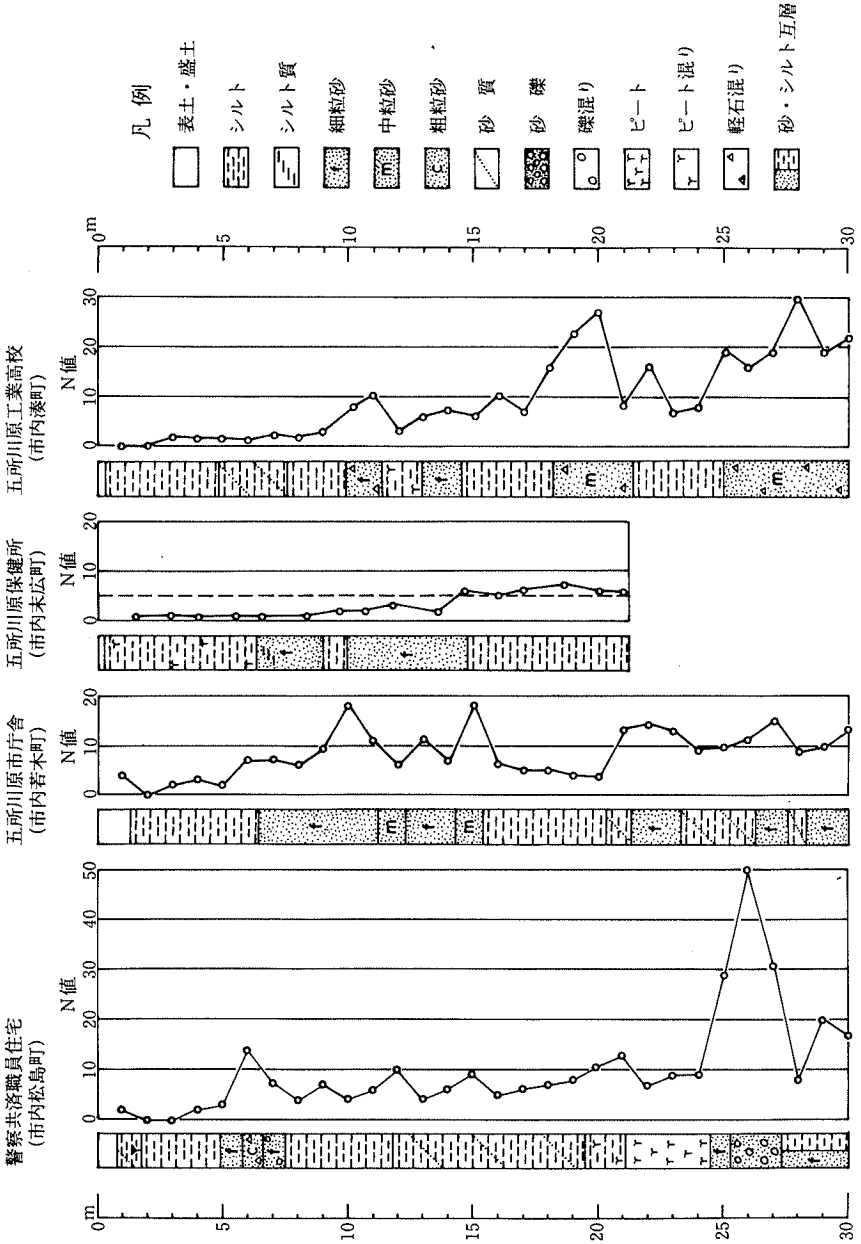
本図幅内における主な地質災害は昭和45年頃から発生した岩木山北東麓に震源をもつ群発地震、昭和50年8月に発生した岩木山百沢土石流災害時の各放射谷における洪水および昭和58年6月26日に発生した日本海中部地震による噴砂および浮苗等である。

岩木山北東麓に震源を持つ群発地震は、その後数年間で止み、現在では全く忘れられている。群発地震は鶴田町や小友付近に集中し、いわゆる直下型の地震であったが災害を受ける程のものはなかった。現在岩木山の北麓に弘前大学理学部が附属地震火山観測所を設けて観測を続けている。

岩木山百沢土石流は岩木山南麓に発達する放射谷（柴柄沢、毒蛇沢、石切沢、蔵助沢および後長根沢）に生じた土石流で、とくに百沢部落を通る蔵助沢の土石流は死者22名、重軽傷者31名、人家全壊17戸、半壊9戸など多大の被害を受けた。現在、これらの放射谷は大規模な改修工事が終り平静を取り戻したようである。この土石流は岩木山の南麓に主に発生したが、東麓および本図幅の北麓の各放射谷でも小規模な土石流が発生した。特に被害は生じないが、谷壁の侵蝕および道路など被害はあった。

日本海中部地震は西津軽郡岩崎沖西方100 Kmの海底を震源としたM=7.7の大地震で、とくに津波による被害が大きく、青森県だけでも死者17名、被害総額518億円に達している。本図幅中での災害としては北西部の屏風山地域における噴砂および木造町を中心とした水田の浮苗や家屋の倒壊が生じている。噴砂は堤間湿地に造成された畑地に生じ、畑作物および農業施設などに被害を与えた。平野部の水田の浮苗や家屋の倒壊は主として泥炭層の厚く発達した所に発生している。

付図 五所川原市内地盤地質



なお、五所川原市を中心とした津軽平野は、いわゆる軟弱地盤地帯となっており、地下水開発等による地盤沈下が進んでいる。

(3) 軟弱地盤

津軽平野には軟弱な沖積堆積物が、かなり厚く発達している。特に都市化が進んでいる五所川原市では、地下水の急激な開発に伴って地盤沈下が生じている

五所川原市内にはビル建築の際に行った多数の地質調査ボーリングがあるが、そのうち本市内の地盤地質を代表するものを4本選んで付図に示した。いずれもシルトおよび泥炭が主体をなし、深度25mまではN値が10以下の軟弱地盤となっている。

(4) 採石・採砂・採土

本図幅中で現在採石が行われているのは岩木山北麓の十腰内字猿沢にある南碎石のみである。南碎石は赤倉沢泥流によって形成された“流れ山”の安山岩を対象とした採石場で、推定埋蔵量は300,000 m³で、昭和57年には92,800 m³の採石を行っている。主としてコンクリート粗骨材および道路用バラストに用いられている。なお、本地区に数多く形成されている“流れ山”の安山岩は藩政時代から採石が行われており数ヶ所に採石跡がみられる。従来は主として石垣用および家屋の土台石用に切り出され、十腰内石と称されていた。

本図幅中で現在採砂が行われているところはないようであるが、北西部の屏風山砂丘地では過去に砂の採取が行われたようである。全般に細粒砂であるため、海砂および山砂に混入して利用されている。

本図幅中で採土が行われているのは北浮田付近の国道101号線沿いと勝山南部との2ヶ所のみである。前者は前田野目層の砂およびシルトを後者はローム質火山灰を採取している。なお、岩木山北麓の各所に畑地造成地があり、そこでは大規模な採土が行われたものと推察される。

(5) 温泉

本図幅中の津軽平野部と岩木山北麓部とは近年数多くの温泉が開発されている。津軽平野部の温泉は石油資源開発株式会社が石油開発を目的として行った1,000 m級

のボーリングによって、その存在が知られ、昭和34年に板柳町で村上勝幸氏が初めて温泉開発に成功した。これが契機となって、五所川原市、木造町、鶴田町、板柳町、藤崎町および稲垣村などすべての町村に多数の温泉が誕生した。

岩木山の北麓における温泉の開発は、平野部の温泉開発より、かなり遅れて行われたが現在温泉登録されているものは5源泉に過ぎないが、30℃前後の微温泉も開発されている。

付表 主要温泉一覧表

源泉名	所在地	深度 (m)	泉温 (℃)	湧出量 (l/mm)	泉質
板柳温泉	板柳町福野田	786	56	234	食塩泉
高増 "	" 大俵	500	43	360	"
松島 "	五所川原市松島	807	52	180	"
西北 "	" 田町	802	52	200	"
青陽園	" 姥苅	582	61	200	"
鶴田温泉	鶴田町釜田	600	43	200	重炭酸・食塩泉
山道 "	" 山道	645	47	180	食塩泉
大沢 "	" 廻堰	925	55	240	"
秋元 "	木造町清水	800	55	150	"
森田 "	森田村月見野	935	48	75	重炭酸・食塩泉
稲垣 "	稲垣村豊川	800	54	250	食塩泉
大鳴沢 "	鱒ヶ沢町建石	370	30.5	120	単純泉
大森 "	弘前市大森	900	47.2	300	重炭酸・食塩泉

これら両地域の温泉の代表的なものを付表に示したが、その開発深度は、いずれも500 m以上で、一部では1,000 mを超えるものもある。泉質は平野部の温泉は、いずれも純食塩泉で塩素イオンが10,000 ppmを超えるものもあり、いわゆる油田かん水的性質を示している。岩木山麓部の温泉は重炭酸・弱食塩泉である。

(6) 地下水

本図幅中における地下水系統は岩木山麓地域、津軽平野地域および屏風山地域の3域

に大別できる。

岩木山麓地域の地下水については昭和52年青森県企画部が「中核工業団地(岩木山北東ろく)、昭和51年度調査」の報告を行っており、これによると標高200m～150mの付近における深度100m～200mの井戸では、いずれも大量な地下水が自噴することが明かになり、良質な地下水包蔵帯を形成しているとしている。既存井の1つである大石農場付近では口径150mm～100mm、深度100m、ストレーナ深度60m～100mの井戸から16℃の良質な水が540m³/日自噴している。

平野地域における地下水は、従来メタガスや鉄分を含む悪質なものとなっていたが、近年深度200m～300mに発達する良質な地下水が開発されるようになった。五所川原市内で深度200m、口径8時の井戸から600m³/日の良質な地下水が揚水されている。平野地域では300m以深は温泉(25℃以上)になることから、いずれの町村でも井戸深度は300m以浅となっている。なお、鶴田町～板柳町付近一帯にある深度150m～300mの井戸では弗素の含有量が、基準値(0.8ppm)を超えているものが多い(最大3.5ppm)。

屏風山地域では砂丘地における水田および畑地造成が行われるようになり、これらの農業用水を地下水開発によって行っている。地下水は砂丘砂(旧砂丘砂)中に包蔵されており、深度40m、口径2～4吋井で約150～200m³/日程度の揚水が行われている。

岩井武彦 (弘前大学)

山内 仁 (弘前大学)

参考文献

- 藤井敬三（1966）：5万分の1地質図幅「金木」，同説明書，地質調査所
- 岩井武彦（1965）：青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質学的並びに古生物学的研究，弘前大学教育学部紀要，No. 14
- 岩井・川村・横山・木村（1973）：表層地質図「弘前」，青森県
- 岩井武彦（1984）：屏風山地域の噴砂について，1983年日本海中部地震総合調査報告書
- 北村信他7名（1984）：地盤地質と災害，1983年日本海中部地震による災害の総合的調査研究
- 水野裕（1961）：岩木火山麓の地形 - 特に泥流堆積物を中心にして，東北地理，Vol. 13, No. 3・4
- 水野 裕（1968）：津軽屏風山砂丘の地形，東北地理，Vol. 20, No. 1
- 尾崎次男・菅野敏夫（1960）：津軽平野の被圧地下水，地質調査所月報，Vol. 16, No. 1
- 大沢穠・平山次郎（1970）：5万分の1地質図「五所川原」，地質調査所
- 八谷彪一（1905）：岩木火山地質調査報文，震災予防調査会報告，No. 48

III. 土壌図

1. 土壌分類の細説

(1) 山地および丘陵地の土壌

山地の土壌は、標高約 800 m 以上に岩石地のほか、乾性、湿性のポドゾル化土壌が分布し、ほとんど林地となっている。標高 400 m から 800 m までは乾性、湿性褐色森林土壌が主体であり、ほとんど林地として利用され、農用地は存在しない。更に標高 400 m 以下丘陵地までは礫を含む淡色黒ボク土壌がほとんどであり、造成林を含む林地、牧野、普通畑などに利用されているが、人工的作用が加わった所は表土の腐植質部分がほとんど失われるか、混層となっている。

丘陵地の土壌は、黒ボク土壌が主体であり、林地、りんご園、普通畑として利用されている。ただし丘陵地西端の一部は岩木山の影響が少ないとみられ、断面形態は類似するが別統に区分した。次いで淡色黒ボク土壌が多く、表土が比較的厚いものと、人工的作用のため表土の腐植質土壌が失われるか、混層となっているものとに区分した。前者は林地、りんご園として利用され、後者は造成林、造成畑、りんご園のほか、かつて開田地として広く利用された所であるが、現在は転作畑となっている所が多い。これら黒ボク土間の沢地は黒ボクグライ土壌、多湿黒ボク土壌が分布し、水田や荒地となっている。

1) 黒ボク土壌

① 弘前統(Hir)：岩木山麓につらなる丘陵地、台地上に広く分布する。表層は腐植質火山灰層(黒ボク)で被覆され、次層には浮石質火山灰層(浮石層)を介し、最下層は凝灰岩質の埴土層である。土地利用はりんご園、林地がほとんどである。植生と土壌肥沃性は、黒ボク層の厚さ、浮石層の硬化程度、土地の排水性に左右されるとともに、pHと塩基類の多少にも影響される。

② 深浦統(Fuu)：岩木山麓につらなる丘陵地上に分布する。弘前統に類似するが、次層がやや異なり、明褐色のローム質となっており、円礫を含む。岩木火山の影響はやや少ないと思われるので分類した。土地利用はほとんどが林地である。植生と土壌肥沃性は弘前統に準ずる。

2) 黒ボクグライ土壌

③ 中野統(Nkn)：岩木山麓につらなる丘陵地および台地間の沢地に狭細に分布する。黒ボク土の二次堆積で、場所によっては強いグライ班を示し、1 m以内に湧水することが多い。ほとんどが水田または荒廃湿地である。

排水が悪く、土壌肥沃性は高くない。

3) 淡色黒ボク土壌

④ 大石統(Oh)：岩木火山地の山麓緩斜面で標高400 m 附近から200 mにかけて、およびさらに低標高の凸部や上部緩斜面にやや広く団地状に分布している。この土壌は黒ボク土壌の退化型とA層の黒味の薄い型よりなり、火山泥流上のもので、特に最表層に粒状や堅果状の構造が発達し、礫を含みや乾燥した土壌が多い。林地生産力は黒ボク土のうちで最も低い。また牧野など人工的な造成畑もこの統に包含させた。表土の黒ボク土壌はほとんど存在しないか、混層となっている。生産力は林地同様低い。

⑤ 清水統(Shi)：岩木山麓の丘陵地または台地の傾斜地に主として分布する。土壌は主として洪積世堆積物の基盤上に、その風化土壌が堆積し、その上層には腐植質火山灰(黒ボク)が薄く被覆している。主としてりんご園および林地である。植生は、表土の厚さと下層土の硬さが根の伸長を左右し、地力保全上では土壌浸食防止が重要である。生産力はそれ程低くはない。

⑥ 長平統(Nad)：岩木山麓の丘陵地または台地上に分布する。表土の腐植土が極めて薄いか、または黒ボク土壌が、造林、開田、開畑など、何らかの人工的作用を受けて、表土の腐植層がほとんど失われたか、混層となっているものを本統とした。粘質の下層土が露出し、生産力は低い。開田地の多くは水稲作を止め荒廃地様のところも少なくない。

4) 乾性褐色森林土壌

⑦ 鍋森山統(Nab)：岩木火山地の標高700 m 以下400 m 附近の凸形斜面や広い尾根に広く分布している。この土壌は厚くA₀(F)層があり、A層は薄く黒褐色で粒状構造が顕著に発達している。又表層近くは角礫が多く、下層は礫とローム質火山灰で、堆積状態は非常に緻密である。すべて林地として利用されているが、林地生産力の劣悪

な土壌である。

5) 褐色森林土壌

⑧ 黒森統(Kur)：岩木火山地の標高 700 m 以下 400 m 附近の斜面中腹部や緩斜面及び沢筋に細長く分布している。この土壌は腐植の流入が深く、下層角礫を含んでいる。すべて林地として利用されているが、林地生産力は中庸である。

6) 褐色森林土壌(赤褐系)

⑨ 大森統(Omo)：弘前市の十面沢、大森附近の小丘陵の頂部に小面積ずつ分布する。この土壌は黒色味の薄い層が上層にあり、下層は 5 YR の色調を呈している。上層下部より円礫に富む。ほとんど林地として利用されているが、林地生産力の劣悪な土壌である。

7) 湿性褐色森林土壌

⑩ 小ノ畑統(Ono)：岩木火山地の北部鱒ヶ沢町に小面積分布している。この土壌は沢筋に出現し、角礫が含まれ、腐植の深く侵透した、理化学性の良好な土壌であり、主として林地に利用されているが、林地生産力の高い土壌である。

8) 乾性ポドゾル化土壌

⑪ 岩木山 I 統(Iwa-1)：岩木火山地の標高 900 m 以下 700 m 前後までのやや広い尾根に分布している。この土壌は A₀ 層は厚く、明瞭な溶脱層はみられないが、集積層は明瞭である。主として林地に利用されているが、林地生産力は極めて劣悪な土壌であり、適木はない。

9) 湿性ポドゾル化土壌

⑫ 岩木山 II 統(Iwa-II)：岩木火山の標高 900 m 以上に分布している。この土壌は A 層上部は多湿であり、下層は密で重粘であり、B 層は鉄・腐植の集積の顕著であり、主として林地に利用されている。林地生産力は極めて劣悪な土壌であり、適木はない。

10) グライ土壌

⑬ 白沢統(Shs)：岩木火山地北側の黒ん坊沼上部附近の山麓緩斜地の沢沿えや丘陵地間の狭小な沢地などに分布する。この土壌はやゝ砂質であり、グライ層を有し、斑鉄を含む。林地や荒廢湿地となっており、林地生産力は低い。

(2) 台地および低地の土壌

本図幅は岩木川が南から北に走り、その両岸に広大な低地が広がっている。それらを取り囲むように南西部から西部の屏風山砂丘地域および北東端に台地が分布する。台地と低地の接点に谷底平野、沢地などが複雑に入り組んでいる。

台地上には黒ボク土、淡色黒ボク土が分布し、林地、りんご園に利用されているが、淡色黒ボク土のうち、開田、開畑など、人工的作用の加えられた土壌では表層の腐植土が除かれるか混層となり、とくに開田では腐植層を欠くものが多い。台地間の小河川流域の谷底平野では多湿黒ボク土壌やグライ土壌が、また沢筋の狭小な平地は黒ボクグライ土壌が分布し、主として水田に利用されている。

低地土壌は、岩木川沿岸の自然堤防には灰色低地土壌が分布し、主としてりんご園を形成している。岩木川から遠ざかるにつれ、灰色低地土、グライ土が分布し、水田、りんご園として利用されている。更に下流になるに従いグライ土が卓越し、三角州上では細粒グライ土から有機物過多の泥炭土の分布割合が増加するようになり、ほとんど水田として利用されている。

1) 黒ボク土壌

① 弘前統(His)：

山地および丘陵地の土壌参照

2) 多湿黒ボク土壌

⑭ 高杉統(Tas)：弘前市高杉、鬼沢部落附近の平坦地リンゴ園に分布し、弘前統の裾野で水田に接し、地下水位が高い。表層は腐植質火山灰層(黒ボク)、次層は浮石質火山灰層(浮石層)であり、弘前統と類似した堆積様式を示すが、地表下80cm位に湧水面がみられ、この過剰水(排水不良)が植生を左右している。

⑮ 久吉統(Hy)：台地間の狭い谷底平野などに分布する。表土は腐植質火山灰層に覆われ、斑鉄が出現するが、1m以内にグライ層は出現しない。ほとんど水田として利用されているが生産力はそれ程高くない。

3) 黒ボクグライ土壌

③ 中野統(Nkn)

山地および丘陵地の土壌参照

4) 淡色黒ボク土壌

⑤ 清水統(Shi)

山地および丘陵地の土壌参照

⑯ 金木統(Kan)：五所川原市金山から飯詰にかけての平坦地リンゴ園に分布する。表層は腐植質火山灰層(黒ボク)にて被覆されているがその厚さは20cm程度でうすい。植生は下層土の埴土層の影響を受け易く、埴土層は水分を多く含んでいる状態では軟いものの、重粘で排水不良地を形成しやすく、乾燥期には逆に硬化して、リンゴ樹根の伸長を阻害する。

⑥ 長平統(Nad)

山地および丘陵地の土壌参照

5) 褐色低地土壌

⑰ 松野木統(Mtu)：図幅東南端の岩木川自然堤防上に灰色低地土に接して分布する。有効土層が深く、下層に斑鉄が発達し、酸化的であり、ほとんどりんご園として利用されている。生産力は高い土壌である。

6) 細粒灰色低地土壌

⑱ 川除統(Ky)：広い谷底平野、三角州上に分布する。表土は埴質土壌が多く、1m以内にグライ層は存在せず、酸化的で斑鉄が発達している。有効土層も深く、生産力は高い土壌である。ほとんど水田として利用されている。

7) 灰色低地土壌

①⑨ 高根統(Tm)：分布域、断面形態ともほぼ川除統に類似するが、表土の土性がやや粗い。ほとんど水田として利用されており、生産力は極めて高い。

②⑩ 岡本統(Oka)：岩木川自然堤防地帯のやや下流部に分布し、灰褐色を呈する埴質土に斑鉄の発達ที่著しい。断面形態は松野木統に類似するが、松野木統より標高がやや低い。ほとんどがりんご園として利用され、生産力は一般に高い。

8) 粗粒灰色低地土壌

②⑪ 川原統(Kaw)：岩木川の河岸地帯に分布する。表層から下層まで粗粒質で、地表下 50 cm 以内より砂礫層が出現する。根群域が浅く、養水分の保持力が小さいので、しばしば干ばつの被害を受け易い。ほとんどりんご園として利用されているが、普通畑もみられる。生産力は中庸である。

9) 細粒グライ土壌

②⑫ 蓮川統(Hk)：広い谷底平野、三角州上に分布する。表土は埴質で、作土直下あたりからグライ層となっており、透水性は悪い。地形によって斑鉄が発達することもある。1 m 以内に湧水面をみる事が多く、湿田相を呈する。ほとんど水田として利用されている。生産力は中庸であり、排水改良により高位生産性が期待される。

②⑬ 蓮華田統(Rd)：分布域、断面形態は蓮川統に類似するが、蓮川統よりグライ層の位置が低く、半湿田相を呈する。斑鉄は良く発達し、1 m 以内に湧水をみることも多い。ほとんどが水田として利用され、生産力は高い。

②⑭ 中野目統(Nak)：分布域、断面形態とも蓮華田統に類似する。蓮華田統よりやや酸化的である。1 m 以内に湧水面が出現することが多い。主としてりんご園として利用されている。生産力はやや高いが、排水改良により更に生産性の増加が期待される。

10) グライ土壌

②⑮ 砂子瀬統(Sun)：広い谷底平野、扇状地末端などに分布する。蓮華田統に類似するが、表土の土性がやや粗いので区分した。斑鉄も良く発達し、1 m 以内に湧水面をみることが多い。ほとんど水田として利用され、生産力は高い。

②⑥ 高屋敷統(Tay) : 広い谷底平野上に分布するが、面積は少ない。蓮川統に類似するが、表土の土性がやや粗いので区別した。作土直下よりグライ層の湿田相で、1 m以内より湧水面をみることが多い。ほとんどが水田として利用され、生産力は中庸である。

11) 粗粒グライ土壌

②⑦ 再賀統(Sg) : 河川流域の排水不良地、河口附近の排水不良地に分布する。表土は薄く、次層から砂質土壌のグライ層となっている。斑鉄の発達も余りなく、湧水面は高く、湿田相を呈している。ほとんど水田として利用され、生産力は高くない。排水改良の効果は大きいものと思われる。

12) 低位泥炭土壌

②⑧ 長富統(Nag) : 主として三角州、狭い谷底平野などの排水不良地に分布する。30 cm 内外より低位泥炭層となっており、全層または作土直下よりグライ層となっている。有機物過多の湿田相を呈し、斑鉄の発達も少ない。1 m 以内に湧水面をみる場合が多い。すべて水田であり、生産力はやや低い。排水改良、客土などの効果は大きい。

②⑨ 夕日ヶ丘統(Yo) : 分布域、断面形態など長富統に類似する。ただし泥炭層の位置が50cm以下と低いので本統を区別した。その他は長富統に準ずる。

(3) 屏風山砂丘地域の土壌

本地域の土壌は、低地の沖積平野の西端に接して台地を形成し、その台地間に日本海側から海岸線に直角に砂丘が象歯状に喰い込んでいる。台地上の土壌は表土が腐植質黒ボク土に覆われ、下層が褐色の埴質土となっているものを黒ボク土壌としたが、砂丘の影響を受けて、表土の土性がやや粗いので、他地域の黒ボク土壌と区別した。また開田、開畑などの農地造成の際、表土の黒ボクが除去または混層された部分を淡色黒ボク土壌としたが、これも他地域の淡色黒ボク土壌と区別した。

砂丘地は乾性砂丘と湿性砂丘とに区別され、防風林、灌木林、荒地のほか、開田、開畑地として利用されているが、農用地として利用する場合、客土が重要な条件となっている。

1) 砂丘未熟土壌

③① 栗山統(Kur) :日本海岸に発達する被覆砂丘上の未熟土壌で、クロマツ林であるため黒褐色の腐植層が認められる。この土壌は深さ約30cm位で黄褐色の腐植のない砂土に連続している。林地生産力は低い。また一部開畑がみられ、客土のほか、灌水施設などの対策を行わないと高生産は望めない。

③② 出来島統(Dek) :栗山統の湿性型である。地下水位は高いが、グライ斑は弱い。湿性荒地、灌水林などの植生である。一部開田などもみられるが、客土を大量に施用しないと普通収量は望めない。

2) 黒ボク土壌

③③ 丸山統(Mar) :屏風山砂丘地帯の東側内陸部の中位段丘砂礫台地上に分布している。この土壌は黒色～黒褐色のA層をもち、黒色味が強く、さらに土性は砂質壤土となっている。次層は褐色壤土となっている。林地、普通畑として利用されており、生産力は中庸である。

3) 淡色黒ボク土壌

③④ 駒田統(Kom) :黒ボク土の表土が、開畑開田の造成時に除去または混層となり、下層の褐色の台地基質が露出するか、浅い位置にあるものを本統とした。他地域の長平統に極めて類似するが、火山の影響が少ないことと、砂丘という特殊性から別統とした。普通畑、水田として利用されているが、生産性は低く、有機物の補給が重要である。

松尾 弘 (大鱗宮林署)

赤坂正一 (青森県林業試験場)

相馬駿春 (青森県農業試験場)

成田春蔵 (青森県りんご試験場)

参考資料

1. 藤崎町・藤崎町農業委員会：藤崎町の土壌と農業の概要……………1958
2. 青森県りんご試験場：青森県りんご試験場報告第7号……………1963
3. " " 第9号……………1965
4. " " 第10号……………1966
5. " " 第11号……………1967
6. " " 第14号……………1970
7. 板柳町：板柳町りんご園土壌調査書……………1965
8. 鶴田町：鶴田町りんご園土壌調査報告書……………1965
9. 五所川原市：五所川原市りんご園の土壌に関する調査報告書……………1968
10. 柏村：柏村りんご園土壌調査書……………1968
11. 青森県：土地分類基本調査（弘前）……………1973
12. " " （青森西部）……………1982
13. 青森県農業試験場：水田および畑地土壌生産性分級図
 （西海岸地域，岩木川左岸地域，岩木川右岸地域）……………1974
 岩木山麓地域
14. " " （岩木川右岸地域，岩木川左岸地域，津軽山間地域）……………1975

IV. 土地利用現況図

1. 農用地

本図幅内の農用地は青森県の穀倉地帯をなす津軽平野と呼ばれる地帯で、大部分は水田とりんご園により大きく占められている。

図幅西南部の山麓丘陵地は戦後に開拓され、りんご、草地、畑等に利用されている。

農家一戸当りの経営面積は県内では比較的大きい地域であり、水田とりんご園の合計面積は、図幅全体の6割を占めている。

(1) 水田

水田面積は約147km²で、その多くは標高20m以下にあり、県営大規模は場整備事業や国・県営農業水利事業等の土地基盤整備事業により整然と整備された生産性の高い水田となっている。又、りんごの生産とならび産業の基盤をなしており、青森県の穀倉地帯となっている地域にある。

(2) 普通畑

図幅の西側に約20km²ほど耕作されているが、木造町では全国的にも名前が知られた屏風山西瓜やメロンが育てられ、岩木山麓では麦畑に利用されているのが多い。

(3) 果樹園(りんご)

図幅中ほどの標高150mあたりから低地に向かってりんご園が開け、図幅内全体では約86km²の面積となるが、この面積は県内りんご園全体の約1/3を占める。

りんご栽培の歴史が古いため、老齢木や欠木も目立ちはじめ、園地の若返りが進められようとしており、わい化栽培や無袋栽培などの省力化が進められつつある。

(4) 草地(放牧採草地)

採草地は岩木山麓の開拓地に多く、長平畜産組合牧場や大石農場があり約11km²ほどの採草地が広がっている。

2. 林地

図幅内に占める林地の割合は約17%で、そのうちの約4割が国有林であり、岩木山に集中している。国有林は標高300mあたりから広がっており、まず、ブナ・ミズナラ群落と人工針葉樹林、次に高くなるとブナ・チシマザサ群落、頂上付近はダケカンバを主とする植生で構成されている。

民有林は人工針葉樹林が多く、細かく点在している状況にある。又、七里長浜の海岸防備林が育てられ、その早期生育が期待されている。

3. 市街地村落

津軽10万石の城下町を中心として栄えてきた地域であるので、古い歴史と優れた伝統を受け継いで発展してきている集落が多く、それぞれの市町村においては、新しい時代に対応するため各種の工夫がこらされ、市町村総合開発計画等に従い、日々努力が続けられている農村地帯である。各市町村の役場が所在する駅前付近は発展しやすいという傾向はあるが、古くからの米とりんごを中心として道路沿いに発展してきている集落が多い。

4. その他

10市町村の土地利用の形態別面積と土地利用の規制区域指定面積は第IV-1表及び第IV-2表のとおりである。

相馬清治（青森県農林部土地改良第一課）

第IV—1表 土地利用の概要

(単位：ha)

区分	総面積 km ²	耕地計	耕地内訳				宅地	山林		その他
			田	畑	樹園地	草地		国有林	民有林	
市町村										
弘前市	273.41	11,914	4,670	345	6,640	259	2,239	2,297	4,777	6,114
五所川原市	167.53	6,674	5,420	96	1,090	68	731	3,041	3,244	3,063
鱒ヶ沢町	340.22	3,370	2,040	733	546	51	224	18,778	7,849	3,801
木造町	120.67	7,232	6,050	1,120	62	—	440	325	1,732	2,338
森田村	23.98	1,412	1,000	50	333	29	116	5	286	579
柏村	13.98	1,099	795	29	275	—	124	—	—	175
岩木町	147.41	3,148	1,070	333	1,530	215	311	6,700	3,444	1,138
藤崎町	21.78	1,688	966	6	716	—	182	—	—	308
板柳町	42.80	3,129	1,700	49	1,380	—	319	—	—	832
鶴田町	46.12	3,167	2,120	17	1,030	—	254	—	160	1,031
計	1,197.90	42,833	25,831	2,778	13,602	622	4,940	31,146	21,492	19,379

資料：耕地及び山林については青森農林水産統計年報（第32次）より

：宅地については固定資産価格概要調査（昭和59年度）より

第Ⅳ—2表 土地利用の規制区域指定

(単位: ha)

区分	市町村面積 km ²	都市計画区域	市街化区域	市街化調整区域	農業振興区域	農用地域	保安林面積	自然公園面積
弘前市	273.41	12,660	2,427	10,233	22,171	12,197	1,015	—
五所川原市	167.53	12,336	—	—	11,847	6,725	1,325	—
鱒ヶ沢町	340.22	1,557	—	—	13,703	3,370	1,593	—
木造町	120.67	640	—	—	11,277	6,844	1,109	65
森田村	23.98	161	—	—	2,369	1,343	44	—
柏村	13.98	558	—	—	1,398	1,082	—	—
岩木町	147.41	5,241	117	5,124	7,253	3,333	162	166
藤崎町	21.78	2,178	181	1,997	1,972	1,601	—	—
板柳町	42.80	4,280	—	—	4,053	2,978	—	—
鶴田町	46.12	4,607	—	—	4,447	3,128	47	—
計	1,197.90	44,218	2,725	17,354	80,490	42,601	5,295	231

資料：都市計画区域は青森県の土地利用 60年3月
 農業振興区域は農業振興地域整備計画総覧（60年3月）
 保安林・公園は青森県の林業 60年度版

1987年3月 印刷発行

土地分類基本調査

五所川原

編集発行 青森県農林部土地改良第一課
青森市長島1丁目1番1号

印刷 (地図・説明書)
昇寿チャート株式会社
東京都台東区台東2丁目27番9号